生贄の島

曽野綾子

生贄の島

曽野綾子

講談社

生贄の島

定価四三〇円

昭和四十五年三月二十四日　第一刷発行

著者　曽野綾子

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話東京（九四二）一一一一（代）
振替東京三九三〇

印刷所　株式会社常磐印刷所

製本所　株式会社国宝社

＊落丁本・乱丁本はお取替えいたします

© Ayako Sono 1970
Printed in Japan

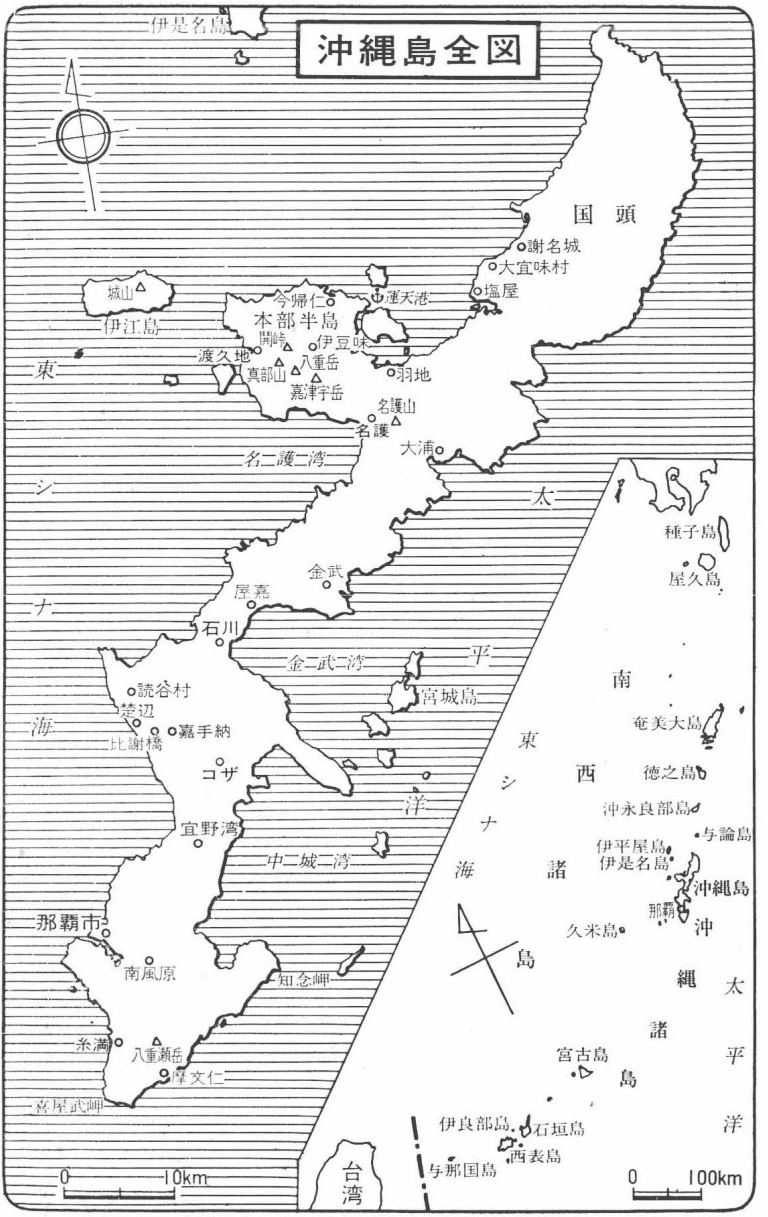
0093-123888-2253（0）

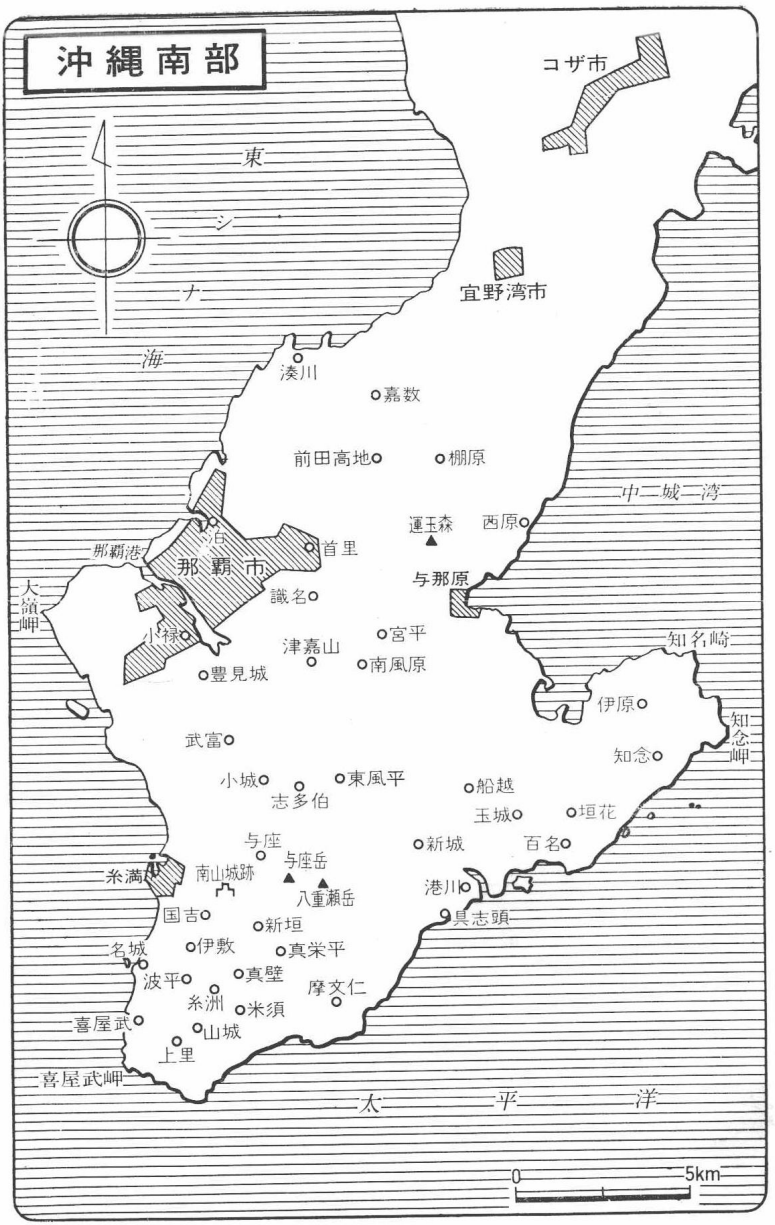
生贄の島

装幀　早川良雄

挿画　三芳悌吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com


沖縄島全図
伊是名島
国頭
謝名城
大宜味村
塩屋
運天港
今帰仁
本部半島
伊豆味
城山
伊江島
渡久地
真部山
八重岳
嘉津宇岳
羽地
名護山
名護
大浦
東シナ海
名二護二湾
金武
屋嘉
石川
金二武二湾
宮城島
読谷村
楚辺
嘉手納
比謝橋
コザ
宜野湾
中二城二湾
那覇市
南風原
知念岬
糸満
八重瀬岳
摩文仁
喜屋武岬
種子島
屋久島
奄美大島
徳之島
沖永良部島
与論島
伊平屋島
伊是名島
沖縄島
那覇
久米島
宮古島
伊良部島
石垣島
西表島
与那国島
台湾
南西諸島
沖縄諸島
太平洋
0 10km
0 100km


沖縄南部
コザ市
東
シ
ナ
海
宜野湾市
湊川
嘉数
前田高地
棚原
中城湾
運玉森
西原
那覇港
首里
那覇市
与那原
大嶺岬
識名
小禄
宮平
津嘉山
南風原
知名崎
豊見城
伊原
知念岬
武富
知念
小城
東風平
船越
志多伯
玉城
垣花
与座
新城
百名
与座岳
糸満
南山城跡
港川
八重瀬岳
国吉
具志頭
新垣
名城
伊敷
真栄平
波平
真壁
摩文仁
糸洲
米須
喜屋武
山城
上里
喜屋武岬
太
平
洋
0
5km

二十五年後に

「井戸は、どこにありますか？」

私（曽野）は、案内をしてくれていた友人に尋ねた。

「井戸まで、行ってみますか。ずっと、崖の下になるんだけど」

沖縄本島の南端、摩文仁の海岸には、絶壁の下に、一カ所だけ湧き水の出るところがある。私はその井戸を見たかったのだった。

私たちは、冬の陽が激しく照りつける、爽やかな海辺の道を下りて行った。日曜日だったので、観光地のように、たくさんの人々とすれ違った。

本土から来た観光団の男たち。

同じリボンの徽章をつけた婦人団体の参拝者たち。

昭和二十年の夏、米軍に追いつめられて自決した中学生たちのひそんでいた海岸洞窟がすぐその先にあるので、皆そこへお参りに行くのである。

私はいかにも、休日を散歩に来たらしい、親子連れともすれ違う。眼鏡をかけた父親は、カメラをぶら下げ、若い母親はジョーゼットのスカーフを風になびかせている。ポパイの絵を誇らしげに胸につけた丸首シャツを着て、ブルージーンのズボンをはいた強そうな女の子が、先へ馳け出して行ってふり返り「パパア、ママア」と叫ぶ。そして面皰づらの制服の高校生が、掌の中の小さなトランジスター・ラジオから、グループ・サウンズのメロディを流しながら、足早やに過ぎて行く。

しかし井戸への道をとると、人の気配は急に少くなった。戦跡の銀座通りから、物静かな横丁へ入った感じである。道はごろごろした石を敷きつめてあって、歩きにくい。

井戸は――私の予想に反して――井桁がある訳でもなく、自然石の中に湧いている泉でもなかった。それは、小さな野天風呂のように、周囲をコンクリートでかためた水場で、灰白色に濁った溜り水が、九分目ほど入っていた。私は持って来た一輪の菊を、その水の上に泛べた。

「これは、みんな弾痕です」

水場の上は、ややオーバーハングした自然石の崖であるが、そこにぽつぽつと、虫の食ったような穴があいている。それが、あらゆる種類の弾のあとなのである。

かつて、この摩文仁の沖には、アメリカの艦艇が、海の祭典のように並び、その砲の先は、いっせいに、この摩文仁の断崖に向けて固定されていた。照準器の拡大された視野の中で、ちょっとでも動くものがあれば——それはこの井戸へ向かって水を求めて来る「日本人（ニッポニーズ）と沖縄人（オキナワン）」であったが——たとえそれが野鼠一匹が走るほどの気配であろうと、岩容を変えるほどの砲火が集中して叩きこまれた。

私は思う。それは、何という、おもしろい、贅沢な狩猟であったろうか、と。アメリカ人は、数百米（メートル）の彼方にいて、崖にひそむ一人一人が、母親に愛されて育った年若い青年や娘であり、夫の帰って来る日をひたすら待っているいじらしい若妻を故郷に残した兵士であることなどを感じずにすんだから、平気で射殺することができたのだった。アメリカ兵は、安全な軍艦の甲板（かんぱん）の上にいて、靴底ひとつ減らさずに、しかも一発だって撃ち返される恐れもなく、チューインガムを噛みながら、生きた標的を追い廻せたのだ。そして、この井戸に水を求めて来た人々は、その弾を受けて、その青春も、肉体も一瞬のうちにとび散った。

「井戸はこの辺では、ここにしかないんです」

友人は崖を見上げながらいった。

かりに十人が、水汲みに出たとする。

何人が生きてこの井戸まで到達したろう。水を汲みながら、さらに何人かが撃たれ、井戸は血に染まった。首尾よく水を水筒につめ終った人々のうち、さらに何人が、水を持って帰れたろうか。

夜陰に乗じて水汲みに出れば、よかったのではないか。

そうだ。誰もが、そう思い、そんなことはもう、皆が試みたのだ。

しかしその頃。二十五年前の夏、沖縄では、夜は衰えるか、あるいは死に絶えていたといってもよかった。攻撃は昼夜をわかたず続き、月よりも明るい照明弾が、夜の死の島を照らし続けていた。

「海の方へ行ってみましょうか」

友人は上着を脱ぎ、汗を拭きながら歩き出した。海へ下りる道は細く、銀色の穂をつけた発育のいい薄（すすき）が両側から柔く迫っていた。

そしてミニチュアのような小さな峠を越えると、突如として海がそこにひらけた！　小径は私を、岩と浜の入りくんだ浜に、魔力でぐいぐいと引っぱって行くように見えた。

何という明かるい鮮かな南海の色であろう。海の色は単一ではなかった。深い藍から、碧羅（へきら）と見まごうばかりの淡

い珊瑚礁の色までさまざまの青が用意されていた。
その時、私は背後に、人の気配を感じた。
アメリカ人の一家が、籐編みのピクニック用のバスケットを下げて来るところだった。私は彼らのために道を開けた。
父親はカーキ色のズボンに淡いピンクのシャツを着て、金縁のサングラスをかけている。その雛型のような、八歳くらいの息子は、父と同じようなブロンドの髪を短く刈りあげ、それがきらきらと冬の陽に輝いていた。
母親は、眼鏡をかけた、いかにも物堅そうな背の高い女だった。彼女はこれまた、同じように眼鏡をかけてひょろひょろと背の高いローティーンの娘を伴っていた。
私の見ているうちに、一家は浜へ下り、適当な砂地を探すと、そこに敷物を敷き、ピクニックの準備を始めた。息子は潮だまりを覗いて何か嬉しげに叫び声をあげた。
それが二十数年の光陰を経た自然の光景なのであった。この平凡な、恐らくは善良なアメリカの家族は、今、彼らが、つややかな林檎やみずみずしいサラダや、よく冷えた壜詰の清涼飲料水を置いて、日曜日のささやかなレクリエーションを始めようとしている砂浜が、どのような凄惨な場所であったかを、知らないに違いないのだ。
そこは、沖縄の戦いの終焉の地であった。
その砂浜には、何事も言い残せずに死んだ人々が、溶けたり、ふくれたりしながら、横たわっていた。死者たちのあるものは、最後の旅に外海へ流されて行き、あるものは形もとどめず、沖縄の土に還った。傷ついて横たわっていた何百の人々は、眼の前に死を見、星空の彼方、宇宙の向こうにも死を感じていた。
また、別の人々は、水のことだけを思っていた。彼らはたまらなくなって、海の水を飲んだ。すると渇きはいっそう激しくなった。阿檀の繁みには、雨水の溜っている所があった。彼らは暗闇で、夢中でその水を掬って飲んだ。すると、その水は血の味がした。死者の血が、そんな所へも流れ込んでいたのだった。
砲声が絶えた後、沖の米軍の舟艇は、奇妙な発音で、マイクを通してこの岡と浜に向って呼びかけた。
「デテコーイ！　デテコーイ！」
ぼろぼろになった人間たちは、憎しみと恐怖に燃えながら、両手をあげてでた。しかし多くの人々にとって、それはすでに遅すぎたのだ。
海からの風が、アメリカ人の女の子の帽子を吹きとばして、私の足許まで、転がして来た。私が、素早くそれを拾

うと、彼女は、雀斑の浮いた顔に、生真面目な表情を浮べながら取りに来て「サンキュー」と礼をいった。それから友人と私は、弾に追いかけられもせず、ゆっくり歩いてもなお、息の切れる坂道を上って、車の待っている表通りへ出た。

昭和二十年、三月二十四日。

薄曇の日であった。風強く、空襲は、前日に引き続いて夜のひきあけから始まっている。この日第三十二軍参謀長、長勇中将は、首里の戦闘司令所の入口に、筆太に書いた、自筆の「天岩戸戦闘司令所」という表札をかかげた。

沖縄師範本科二年生・喜舎場敏子は、ほっそりした女学生で、一部屋十二人の寄宿生の室長でもあったが、その朝、警報と同時に彼女の眼に映ったものは、信じられない異様な光景であった。

風が埃をまきあげていたが、港の方面の空に、微かに朝の気配を遮るほどの無数の黒点が浮かんでいたのだった。

敏子が、何も知らない女学生だったら、彼女はそれを、鳥の大群と思ったかも知れない。しかし彼女はすでに、十九年の十月十日の大空襲以来、その無気味に空を威圧して来るものが、何であるかを知っていた。彼女の舌は乾き上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

がり、指先は冷えて震えた。彼女は一瞬、防空頭巾をかぶった頭をきっと上げて、その黒点を睨んでいたが、次の瞬間には、メガホンで叫びながら駆け出した。

「空襲！　空襲！」

彼女はその日、伝令当番であった。

廊下を走ると、埃の匂いがきつく匂った。初めは蚊の羽音に似た無目的なものうい爆音が、今日は、意外に早くこちらへ向かっていた。彼女は自分に危害を加えるものに、一つの意志があることを、その瞬間、初めて感じたのだった。

彼女が同室の十二名をせき立てて外へ出た時、すでに爆音と異様な気配は迫って、地面の上をまっすぐ歩いているものはなかった。誰もが走ったり、伏せたりしていた。遠い壕まで行く閑はなかった。彼女たちは、一番近くのタコツボに、兎のように塊って身を伏せた。

沖縄師範予科二年の前原静子は几帳面な性格だったので、部屋をかけ出しながら、蒲団もあげ終り、着換えもすんだ時に空襲が始まって、本当に幸運だった、と考えていた。もっとも、すぐにそれはおかしな考えだとも気付いた。なぜなら、寄宿舎が焼けてしまえば、蒲団をたたんであろうがなかろうが同じじゃないか。それくらいなら、顔を洗えて、そして朝食をすましたあとだったら、どんなによかったか、とむしろ考えるべきなのだ。

彼女は皆といっしょに、「ローレライの丘」まで夢中で走った。どうしてそんな名前がついたのかわからない。傍に水の枯れた安里川がある。丘は土手なのである。そこに、去年の空襲の後、男子部の学生が作ってくれた小さな掩蔽壕があった。いかにも素人っぽい作りの壕である。土手を少し掘り込んで、戸板を載せ、その上に土をかぶせてあるだけだった。

しかし、前原静子は、そこへ入ると満足していた。穴倉にひそむことは飯事（ままごと）をしているようで、少しおもしろい。そんなことは口に出していえなかったが、緊張は決して不快感を伴ってはいなかった。

悪い天気ではなかった。土手にはたんぽぽが咲いている。空襲でなければ摘んで行くのに。

知らず知らずのうちに、静子は入口に近い所に立って、アメリカの艦載機が低空で地をなめるように飛ぶのを覗いていた。

時計は午前九時を廻った。

喜舎場敏子は、その頃、不思議な響きを掩蔽壕の中で聞いた。雷が地の中で鳴っているような轟きである。爆弾も焼夷弾も、破壊的ではあったが、それらはあくまで、この

地表に存在しているものの気配であった。新たな物音は、地核の中から、時々、大地を微かに揺すりながら、一切の地上の騒音の下をかいくぐって、着実に伝わって来た。

「雷かね？　地震かしら」

気がついている者もあった。

沖縄には地震はない。誰も確信はなかった。

師範女子部の教諭・仲宗根政善も、同じ頃、家の近くの城岳食糧営団の壕にいてその音を聞いていた。天久、垣花の高射砲陣地に正確にはいって行く爆撃の音とも違う。不安に駆られながら、仲宗根はゲートルを巻いたズボンの膝を抱いて坐っていた。早く学校へ行かねばならない。しかし、この執拗な空襲では、とても外を歩いて辿りつけそうにはないのである。

そのうちに、重い靴音が慌しく、駆けこんで来た。那覇署の巡査である。

「艦砲だ。港川がやられている」

壕の中でざわめきが起こった。仲宗根は壕をとび出した。

空襲は無論、恐ろしくはあったが、それは皮膚の上を通り過ぎる緊張であった。おぞましい思いで血が凍りそうになる。しかし艦砲は、見知らぬ不気味な他人から、直接、手を掴まれることと似ている。もはや、気配と予感の時期は過ぎて、彼らは出会ったのであった。

出会ったといえば、その頃、北谷の浜では、沖縄県庁人口調査課員・大庭正一が沖の輸送船から何隻かの上陸用舟艇がこちらへめがけてやって来るのをタコ壺の中からじっと見つめていた。

来るべきものが来た、という感じであった。彼はもとは小学校の教諭だったが、疎開行政と戦闘準備のために置かれた人口調査課に配属されていたので、一般の人々は知らない情報も握っていた。米軍の上陸する時期は、一部では三月二十日頃だろうとも予想されていた。四日しか違わなかったのだ。

上陸用舟艇は岸に近づいて来ると、米兵たちは勇ましく、水の中にとび下りた。それがみんな黒人兵だったので、大庭はびっくりしてしまった。彼らが砂浜に足を踏み入れて、標的が安定した所で、日本軍の機関銃は火を吹いた。

波打際に硝煙が立ちこめると、上陸用舟艇の中には引き返すのも出始めた。

その日、上陸は三波にわたって試みられた。いずれも最前線は黒人なのだなと大庭は思った。（しかしこの記録は日米どちら側の記録にもない。可能性としてはコマンド部

隊が、映画などで見るように顔に墨を塗って、海岸の状態などを調べていたのかも知れないと思われる）

女学生たちは、ずっと無邪気で、はるかに実際的な生活力に満ちていた。

喜舎場敏子は、空襲の合間に炊事場へ御飯を炊きに行った。前原静子の壕には、誰かがお握りを運んでくれたが、それにはお菜もなければ塩味さえろくについていないので、静子は不満だった。女学生たちは、一日中ぼそぼそと小声で壕内で喋り続けていた。

やがて日が暮れると、空襲の波は引いた。すでに天久、垣花の高射砲隊は破壊されたのか、その静寂がじわじわと夕暮とともに拡って来た。

一部の生徒を連れて、識名の高射砲陣地の壕に避難していた教諭・岸本幸安は大きな奉公袋を持って立ち上がった。彼は在郷軍人だったのである。しかし今、彼の奉公袋の中には軍隊手帳の他に、新札で百数十万の紙幣がぎっしりと詰っていた。彼は経理の担当者で、この混乱の際にも、生徒たちを救うためには、この金を安全に保管することは何より重要だ、と考えていた。

同じ、識名の陣地壕にいた、教諭の西平英夫は、今日の空襲に対して、この陣地からは一発も撃たなかったのは、どうしてだろう、ということが心に重くひっかかっていた。この陣地の土運びは生徒も手伝ったのだ。その輝かしい陣地の砲が火を吹き、アメリカの飛行機を撃ち落すのを夢みて、息を切らし、汗と泥で動物のようになりながら働いたのだ。

なぜだろう。

「隊長殿がお呼びであります」

呼ばれて振り返ると、顔見知りの梶屋軍曹であった。

遅れて識名へとび込んで来た仲宗根政善も、岸本幸安も、暗い壕内の通路をぞろぞろとついて行った。

「今日は、いろいろごちそうさまになりました」

仲宗根は隊長に穏かな声で礼をいった。朝から何も食べていない百数十人の生徒のために、隊では肉入り飯を炊き、それをお握りにして配ってくれたのである。

「いや、生徒さんたちには、昔からお世話になりましたからね。しかし、実はそのことでお願いしたいのは、御承知のように、軍は、いま、食糧の食い延ばしをやっていますから、夕飯を炊いてあげたことは、ないしょにしていただきたいんだが」

礼をいうより他の言葉は思い当たらなかった。生徒たち

の面倒を見てくれた梶屋軍曹も傍に立っていたが、その無言の眼ざしの中に温い潮流が流れたように西平は感じた。
いつの時代にも、子供たちに食事を与えられるという平凡なことは、そのまま、永遠の、そしてかなり偉大な喜びなのだ。
「隊長殿にお伺いいたしますが、今日は、なぜ、撃たれませんでしたか」
西平は尋ねた。それから、はっとした。蠟燭を一本灯した傷だらけの机の前で、それまで輝いているように感じられた隊長の視線が、一瞬のうちに、何かを拒否して閉されたように思えたからである。
「命令がまだ、出ておらんのです」
沈黙があった。西平は、相手を苦しめたかも知れないことを感じながら、その前を辞去した。
壕を出たところからは、いつもと変わらない優しげな表情の東支那海が見えた。慶良間列島が、衰えかけた夕映えの中に面を伏せて黙していた。ふと、あそこでは何が起こっていたろうか、という思いが頭をかすめたが、誰も、声なきものの存在をしみじみと思いやる閑はなかった。
彼はその日沖縄に六百機が飛来し、七百発の艦砲が撃ちこまれたことは知らなかった。
ただ西平は沖縄全島が、白い煙で包まれているのを見た。昼間の黒煙が白煙に変わったということは、戦火が消えかけていることを意味している。先のことを深く考えなければ、穏かな、微かな甘ささえ含んだ夕暮がやって来たのだ。
事実、人々は壕を出て家へ帰りかけていた。
県立図書館の司書であり、球部隊兵站本部に所属していた「防衛召集」兵（正規の軍事召集ではなく、便宜的に集めた集団）池宮城秀意も、今日は一日中作業もなく壕の中でごろごろしていたが、宿舎に戻ろうとしていた。すると、一軒の農家の庭先で、紺がすりのもんぺをはいた一人の娘が、まだ戦争など始まらぬ平和な日々の、と或る夕方のように、ゆっくりと茶碗を洗っていた。
池宮城の心は躍った。
彼はその朝、その娘の家の井戸で、一ぱいの水を飲ませてもらい、空襲の最中に、この初々しい娘をひとり置いて行くことを、心配していたのだった。
今、その娘が、何事もなかったように、黄昏の中で茶碗を洗っている。
しかし、変化がない訳ではなかった。生徒たちも寄宿舎へ帰りかけていたが、今夜中に南風原の陸軍病院に動員になるだろう、という噂が伝わっていた。前原静子は、炊事

婦のおばさんが即死したことを聞いて衝撃を受けた。
偶然に彼女は、その現場を通りかかった。大きな弾痕に、夕闇が溜っている。芙蓉の枝が、爆風で千切れていた。静子は何気なく、傍の大木を見上げた。
木の幹に、蒼ざめた花のようなものが見えた。月が上りかけている。静子は目をこらした。戦慄が背筋を走った。そのくちゃくちゃになった花のようなものは、人間の耳であった。
西平英夫教諭は、師範女子部部長西岡一義の住んでいた官舎に向った。学校の榕樹(ガジュマル)の大木は、そよとも動かない。
西岡一義は、暗い家の中に一人で坐っており、傍に、すでに包装のできた何個かの荷物が置いてあった。
「西平です」
西平は疲れているのを感じた。部長が一日の労を労(ねぎら)うのを聞きながら、彼は座敷に上った。二言三言喋べってるうちに、突然、部長は興奮の面持ちで、
「西平君、死んでくれるか」
そういいながら西平の手をとった。西平は当然だと思った。死ぬ、と決めた訳でもない。死とは何かを、わかっている訳でもない。しかし死ぬのはいやだ、とか死にません、とか言って避ける根拠も方途もなかった。西平は、自分の貧しさと、無力さを感じていた。未来を我が手で創り得るとも思わなかったが、学問も思想も、人間を生かすことに、これほど無力だということは西平には思いがけぬことであった。
いよいよ、御奉公の時が来た、と西岡部長はいい、西平は頷いた。
「私は、今日から、首里の軍司令部に行きます。野田校長は、男子部について行かれるそうだから」
西平はそれを自然だと思った。こうなる前から西岡部長は、軍との関係が密接で、首脳部との近づきも多かった。戦況が緊迫しない前には、西岡は沖縄特産の黒砂糖で作った羊羹(ようかん)と生徒の菜園から採れたバナナを手土産に東京の文部省へでかけた。生徒の中には「私たちのバナナをひどい」という者もあったが、羊羹とバナナの出張の後では、寄宿舎の畳と蚊帳がてきめんに新らしくなったのである。人には居るべき場所がある。西岡部長は教育者としてより、有能な政治家として首里の軍司令部にいればよい人であった。
寄宿舎では、生徒たちの引っ越し騒ぎが始っていた。その夜、初めて生徒たちは、土足で畳の上に上った。荷物は

もう誰もがまとめてある。それでもなお、最後にアルバムから記念の写真をはがす者、荷物を再点検する者、友達を探す者などでごった返した。

師範の本科二年の島袋トミは下級生が、

「面会の人が見えてます」

と呼びに来たので、訝かしく思いながら出て行ってみた。宜野湾から来た父と母であった。

「どうして来たの？」

嬉しくはあったが、取り縋る気分にはならなかった。気が張っていた。

「艦砲があまりひどかったからね」

母は泣いていた。トミは最上級生でもあり学校で三人の寮長の一人だった。自分が取り乱したり、怖がったりすることは立場上許されなかった。

「大丈夫よ。私ら識名の陣地におったから」

「お前ひとりをうちで、戦地へやるなんてことは考えられないから、いっしょに帰っておくれ」

「そんなことはできません」

帰りたい気持ちはあったが、トミは、そんな気分を心の中におし込めようとしていた。母が田舎へ帰れば、山羊も豚もいるし、卵もあるし、というのを聞くと、トミは、

「お母さんて、何てくだらないことを」と思った。

「もうすぐ卒業証書がもらえるという時に、そんなことできるものかね、お母さん」

トミはわざと突き放すようにいい、それからすぐに後悔した。

「とにかく、お母さん、今日は帰れんよ。急だもの。もうすぐ卒業だから、そうしたら、免状もって帰るからね」

それまで、黙っていた父がやっと母を宥めた。

「私らからも、学校にお願いしてみるからね。卒業したらすぐ帰っておくれ。お父さんは、空襲が終ったらまた、来る」

トミはうん、うんと頷いた。母が手に持っていた風呂敷包を渡した。胸に抱くと重さと感触で、バナナの葉に包んだ油味噌（豚肉を入れて調理した甘口の味噌、保存がきく）だとわかった。

「ありがとう」

トミはにっこりした。二人を見送って、もう一度、

「卒業したら帰るからね」

と声をかけた。母に対してむごいことをしたような気もしたが、母が油味噌を持って来てくれたということは、つまりトミが帰郷することを初めから半ば諦めていたことだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com